

平坂 寛さん (生き物ライター)

外来魚を食べて考えた

生態系の破壊者、つまり悪モノとして駆除の対象になる外来魚。だが、「駆除、駆除」と短絡的に考えていいのかわからないのか？ そこで無類の生き物好きの平坂さんは全国の外来魚調査に脚に出た。しかも調査だけでなく、食べた。あらゆる調理法を駆使して――。

――外来魚や深海魚を捕まえて食べるきっかけは？

なぜ？ とよく聞かれるのですが、塩がしょっぱいのが当たり前のように、気がついたら生き物が異様に好きだったとしか……。

両親によれば、物心つかないうちから生き物の凶鑑を熱心に見ていたそうです。子供のころはヒマさえあれば凶鑑やNHKのドキュメンタリーばかり見て妄想を膨らましていました。いつか、捕まえてみたい、と。

だからいまの喜びは、凶鑑でしか見たことのない生き物を捕まえること。で、それを超える喜びは、凶鑑でも見たことがない生き物を間近で見ることです。

――産まれた瞬間から三十歳になるいまままで、まったくぶれなかったわけですね(笑)。

ただ中学、高校のころって女の子にモテたいじゃないですか。でも、魚や虫ばかり探して捕っているやつって気持ち悪がられますよね。だから、当時は生き物好きを隠して生きていました。その反動で、家に帰ったらずつと生き物の本ばかり読んでました。

――研究者という選択肢は考えなかったんですか？

子供のころの夢が研究者でした。『ファーブル昆虫記』をはじめとする生き物の採集記や探検記を読むうち、あちこちを旅して動物や生き物を探し、観察して

文章にしていく……そんな生き方、最高だなと考えるようになったんです。研究者や博物学者になれば、彼らのような生き方ができるし、生き物について最先端の知識を得られる。オレにはこれしかない。そう思ったんですが、現実とは違いました。

――とはいえ、琉球大学と筑波大学の大学院で生物について専門的に学んだわけですよね。

逆に大学、大学院の生活で研究者はそんなに自由な職業ではないと気づいたんですよ。かつて読んだ研究者のような生活をするにはどうしたらいいか。考えた結果、フリーランスの生き物ライターになったんです。



●ひらさか・ひろし 1985年、長崎県生まれ。琉球大学理学部海洋自然科学科卒業。筑波大学大学院生命環境科学研究科環境科学専攻博士前期課程修了。著書に『外来魚のレシピ 捕って、さばいて、食べてみた』『深海魚のレシピ 釣って、拾って、食べてみた』(ともに地人書館)。

いまの研究者は、生き物の知識をある程度持つ人がさらに専門性を深めるための小難しいモノを書く傾向にあると思います。けれど、大学で学んでいくうち、生き物について知らない子供でも気軽に読めて、生き物が好きになるような面白くて分かりやすい本が必要なんじゃないか、と考えた。生物の参考書よりも、生き物の面白さや魅力が伝わる入門書を書きたいと思うようになったんです。

その場しのぎの駆除はよくない

――著書は『外来魚のレシピ 捕って、さばいて、食べてみた』と『深海魚のレシピ 釣って、拾って、食べてみた』。最初のテーマを外来魚にした理由は？

外来魚に注目したきっかけは大学受験です。琉球大学の構内の池にプレコ(鰕のような鱗と大きなヒレを持つ南米原産のナマズ目の魚)がうじゃうじゃ泳いでいたんです。なんだこれは、プレコみたいだけなんで大学に……と試験が手につかないほど気になって、気になって仕方なかった。

入学後、魚類の研究室の先生に聞くと、「プレコだ